



千里の行も足下に始まる。
何事も継続が大切ですね。



沖縄県医師会医学会耳鼻咽喉科分科会 会長
鈴木 幹男 先生

Q1.2011年8月号の「分科会研究会等からの報告コーナー」では沖縄県医師会医学会耳鼻咽喉科分科会会長として会の活動などご紹介を頂き、ありがとうございました。会長に就任されてからこれまでを振り返っての感想をお聞かせ下さい。

沖縄県の耳鼻咽喉科分科会は、まず医師会分科会として1967年10月14日に、渡嘉敷一郎先生を初代会長として13名の耳鼻咽喉科医が所属し発足しています。祖国復帰を経て、日本耳鼻咽喉科学会沖縄県地方部会が1975年に発足したことから、地方部会が分科会を兼ねるようになりました。私は2006年に琉球大学に赴任し、4月から分科会会長に就任し、7年になります。これまで最も大きな行事では、2008年に九州連合地方部会学術講演会を那覇で開催しました。この時は200名を超える耳鼻咽喉科医が九州全土から集まり熱気溢れる討論をいたしました。会員数は、他府県と比べるとまだ少ないですが、2013年に104名になりました。

Q2.鈴木先生が目指す分科会運営の方針、今後の展望、課題等についてお聞かせ頂けないでしょうか。また、耳鼻咽喉科分科会において特に力を入れている活動があればお聞かせ下さい。

分科会では、医事問題・学校保健など日本耳鼻咽喉科学会に関連したものの他に、耳の日、

鼻の日活動を行なっています。耳鼻咽喉科が扱う領域には、摂食・嚥下、聴覚、平衡覚、音声、言語、呼吸、嗅覚、味覚などを司る複雑な感覚器、運動器が含まれていますが、その代表が耳と鼻だと思います。毎年、3月3日、8月7日に耳の日、鼻の日講演会を行ない、早期診断・治療につながるように、啓発にとりこんでいます。

新臨床研修が始まってから、耳鼻咽喉科医を志す医師は30%程度減少しています。特に九州地区と東北・北海道地区では減少が目立っています。幸い沖縄県では、毎年新たに耳鼻咽喉科医になる若い医師がおり、その点では恵まれていると思います。耳鼻咽喉科分科会は、小所帯であるためか、会員同士も仲が良く親睦ゴルフ会もしています。また、内地から沖縄へ移住される耳鼻咽喉科医も増えてきています。分科会に参加していただける先生はよいのですが、あまりお見えにならない先生には情報を届けにくく、特に離島ではそのような傾向があることが悩みです。

医学の進歩とともに、長生きできるようになりましたが、長寿そのものよりもQOLを維持して長生きできるかが問われるようになってきています。耳鼻咽喉科分野では、聞こえや嚥下の問題を扱います。聞こえなければコミュニケーションができなくなり社会から孤立しやすくなります。また、嚥下を上手にで

きなければ、むせや嚥下性肺炎を起こしやすくなり、命に関わります。分科会ではこれまでも聴覚補償や嚥下指導・リハビリに取り組んできましたが、さらに積極的に関与してゆく必要を感じています。

Q3. 県医師会に対するご要望等がございましたらお聞かせ下さい。

沖縄県では、優れた臨床研修システムが普及し、全国から多くの若い医師が研修に集います。しかし、初期研修を終えると再び県外に帰り、沖縄に定着する医師が少ないのが現状です。医師の生涯教育は1施設でできることではなく、県医師会が中心となりさらに活性化してゆくことが必要と考えます。その点で、初期臨床研修医の表彰はモチベーションを上げる点で有効だと思いますのでぜひ継続していただければと思います。また、沖縄振興計画では多くの予算が投入されています。この機会に、沖縄県と協力して、医師の教育や災害医療・医療拠点の整備

にもさらにコミットしていただくことを望んでいます。

Q4. 大変ご多忙の身であります、日頃の健康法、ご趣味、座右の銘等がございましたらお聞かせください。

できるだけスポーツジムに通うようにしています。水泳もたまにしますが、主にランニングをしています。趣味はゴルフと映画鑑賞です。ゴルフは練習が足りないのか、なかなか上達しません。ブービーやブービーメーカーから脱出したいです。最近の座右の銘は、千里の行も足下に始まる（コツコツと積み重ねてゆく努力が大切）です。琉球大学でも、分科会でも、一足飛びに活動が結実するわけではなく、地道な努力が必要だと肝に銘じています。

この度はお忙しい中、ご回答頂きまして、誠に有難うございました。

インタビュアー 広報委員 金谷文則

